

朝日新聞社編

續
地方記者

朝

日新聞社編

續

地方記者

書名 続地方記者

定価 三二〇円

昭和三七年八月十日第一刷発行

編者 朝日新聞社

発行者 朝日新聞社 伴 俊彦

印刷所 株式会社精興社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 名古屋 小倉

続 地方記者／朝日新聞社刊

続地方記者・目次

《はしがきに代えて》支局長ぐらし	1
ダム記者	25
親さがし記者	44
「駐在さん」記者	59
高校野球記者	78
離れ島記者	92
「人権スト」記者	107
さいはての根室記者	117
「室戸」の記者	129
県境記者	144

任俠記者

158

空っ風記者

179

ナメクジ記者

194

湖畔の人情記者

204

三池争議「取材前線本部」記者

214

「金親」と農村記者

231

「ハマ」の宿直記者

243

「健康優良児」記者

254

「狩野川台風」記者

264

あとがき

278

装幀 佐野繁次郎

続
地方記者

支局長ぐらし 《はしがきに代えて》

1

支局長は鵜匠だ。支局員、通信局長が獲物を捜して泳ぎ回る。その首っ玉に電話が結びつけてある。夕刊どきと朝刊どき、ウがはき出す原稿を支局長は電話さばきでこなしてゆく。交通事故、けんか、傷害、窃盗などからザコかアユかを選び分ける。

「またダンプかね。被害者は。子ども？ 死んじゃったの。ひどい奴だ。もう一度掘って見てくれ、子どもなら『浪花節』がきつとある」

「けんかに酔払いか——。地方版で行きましょう」

通信局からも来る。

「また魔の踏切ですよ。ちょっと長尺ものになりました。お願いします。写真はハイヤーで持って行きました」

「坊や、写真が来るよ、液温たのむ」

支局では雑用の神さま、原稿係の「坊や」が暗室で液温の調整。

こうした原稿が専用電話で本社に流れると、今度は支局長がウの役割だ。

「さっきの交通事故の原因は何だ」

と専用電話で呼んでくる。

「まだわからんな。居眠りだろうがね。うっかり書くとすぐ名誉棄損とくるんぞね」

正午すぎ、一しきり電話の間遠になったところで支局長はソファにうーんと身をのばしてペンダコの皮をむき始める。ところが、こんな時に限って腹の立つ電話がくる。

「きょうは新聞休みかね」

「いいえ」

「そんならなぜ配達せん」

「悪かったですね。販売店にすぐ届けさせましょう。お宅は？」

「新聞は朝配るもんだ。今配って何になる」

灯ともしごろまでは地方版作り。「坊や」は駅へ通信局からの原稿を、県庁へは県政記者の原稿を受取り、自転車走らす。県警詰めから「A市で山火事、くわしいのがわからないので——」

と連絡。A通信局へ至急報。

「はい」

お嬢ちゃんだ。

「こんなにちは、パパは」

「警察です」

「あのね、支局へ電話お願いっていいってね」

「はい」

通信局長夫人から送稿してくる。

「三日朝七時ごろ、B市の海岸に、七十歳ぐらいの男の水死体があるのを——」

自殺だな、ボツにしよう——と考えながら原稿をいただく。

夜、列車送りする原稿に赤エンピツを加える。これがすむと一応一日が終る。あとは明日の紙面企画と駄弁。支局員は当直一人を残してそれぞれの巢へ散る。

夜が更けると支局の電話は、ぼくの枕許にまで入りこんでくる。サツ警戒の当直記者は時にこの電話で深夜の殺しなどを送稿してくる。寢床でぬくもっているぼくは申訳ないと考えながら原稿を本社へ。しかし時にはこんな電話もくる。

「新聞社かね、きょうのナイター、どっちが勝ったかいねえ」

東京、名古屋、大阪、九州、さらに北海道から裏日本と各支局にぶら下がった専用電話はほと

んど眠ることをしない。何本かの回線をあふれた世界中のニュースが、ぼくの枕許を通じて流れてゆくのが聞える。かくて新米支局長は不眠症にとりつかれる。

2

昔は変り者の支局長が多かった。どこの支局へ行っても昔の支局長の伝説を語り伝えている。

A支局長は原稿用紙の裏をもう一度使わせたそうだ。電話の私用は厳禁、奥さんや坊やがモシモシとやるのを見つけると、怒鳴りつけたあと料金を徴収する。ある日のこと、土地の専売公社のお偉方^{まらがた}が支局にごあいさつに來た。専売行政など支局長も愛想よくやりとり一くさり。

「実はこのたび新製品を販売致しますにつきましては大方のご宣伝を何分よろしく」と、のしをついたたばこの箱詰を差出した。その瞬間A支局長の顔色が変わって、

「失敬なことをいうな。新聞記者が物をもらって記事を書くと思うか」

と怒鳴りざまに箱詰を床に叩きつけた。飛散ったたばこを拾い集めてお役人は真青になって帰って行った、というのはほんとにあったことらしい。

Bさんの癖は原稿用紙をむだにすること。朝出勤すると机にうず高く原稿用紙を積み、その上に右手をのせたまま机にどっかと半身に構える。しばらくすると右手が一枚の紙を握りつぶす。

これを肩越しにぼいと投げる。あらぬ一点に目をすえながら右手に握りつぶしてはぼいと投げる動作の間、B支局長は地方版の素晴らしい構想を練っている。

C支局長は「学習院」とあだ名のあるノーブルな紳士。柔よく剛を制した。戦後間もなくの高校野球の地方大会には地元のやくざが応援団を組織して来る例があった。審判のジャッジが気に入らないと、団長がドスを懷にしてマウンドにあぐらをかいてしまう。

「試合が出来るもんならやってみろ」

試合は中止、審判団も本部も宿に引揚げて対策を練る。宿は怒号に取囲まれる。

「出て来い。ぶっ殺してやる」警官が警戒に出る。こんなときC支局長が引張り出される。すると間もなく納まってしまふ。

「あなたにご足労願ってわしの顔を立てて下すった」

ということらしい。C支局長がどんな手を使ったのかだれも知らないが、二年続いてCさんはその徳を発揮した。

ぼくもまたそのうち伝説を残して消え去って行く身だ。仕事を終えて事務所と壁一重の家庭へ帰ってくるのだが、ぼくは家庭に亭主の座を持たない。どこの亭主もここはオレの座^{すゑ}る場所、ときめた一角を家庭に持っているはずだが、ぼくは座敷をただうろうろと歩き、やがてのこと一本ぶら下げて夜勤のいる支局に戻ってくる。「たまにゃいいだろ」などといいながら若い支局員と

茶碗酒^{ちやわんざけ}を飲み、昔の手柄話に気炎を上げ、夜が更けて戻ってくる。

こうした無邪気な支局長たちが、赤エンピツを持った瞬間、多かれ少なかれ、何かの形で鬼的根性が生れてくる。初めて支局長のイスに座った気持は、女房の持ちたてのように、この地方版をオレの好きなように仕上げて見せるという張りで有頂天になる。この記事を明日の紙面にこう飾るという張りだけで一日を過ごす。その夢が翌日の紙面で無残に破られてでもいると、やり切れない気持を一日中持ち続けて妻にも子どもにも当り散らす。だから、支局長や通信局長を「バケヤロ」と怒鳴るオニ支局長はもういなかったが、専用電話で本社のデスクとけんかをするのは支局長の日課。

「黙ってポツじゃ浮ばれないな。どこが面白くないんだ」

挙句のはて、もう原稿は送らんぞ、などと怒鳴ったりする。しかし、練りなおし書きなおし仕上げた小さなコラム「青鉛筆」が翌日紙面の片すみに輝くように載っていたりすると、一日のすがしさは格別。たった一日の命しかないニュースを支局長はいつまでも覚えていく。

3

まだかけ出しの支局長のころ、支局長にはいろんな仕事があるもんだと申訳なく思ったこと

がある。占領下の日本だからしょうがないがあんまりだ、と腹を立てながら支局長は民政部発表の原稿を書いている。まだ公選時代の教育委員候補にあるグループから推されて立候補した男があった。占領軍の民政部が「この候補者の推薦母体のグループはきわめて非民主的なグループである」という談話を、各社の支局長を集めて発表した。ぼくの支局長が質問する。

「この談話の趣旨は、新聞に書けということですか」

「書くかどうかは諸君の自由である。しかしながらこれは民政部のステートメントだ」

それから約一カ月後大変な問題に発展した。ある民主団体が問題の視察にやって来て声明を発表した。教育委員選挙をめぐって選挙妨害があったから告発するという声明をぼくは十行記事にまとめた。翌日その記事が地方版のトップにのってしまった。支局長は地方検察庁に呼出された。「この記事は一方的だ。なぜ反対側の意見を掲載しないか。だいたいあの事件は民政部の命令によって行なわれたものだ。君の新聞は米軍にたてをつくつもりか」

「あの記事はただの雑報だ。反対派の意見をそえて掲載するような性格のものではない。従って事実として掲載する」

こんなやりとりがあったらしいが、その後「君の支局には共産黨員がいる」などの形に発展して地方版三カ月分を英訳してGHQに持って行くなどの大ごとになってしまった。若いぼくは何も知らないうちに、支局長がみんな片付けてしまった。気軽に笑って支局員の責任をみんな自分

で片付けた支局長の立場を、当時ぼくは当り前だぐらいに考えていたのではなかったか。

ある日、ぼくにも似たような問題が起きた。例によってペンダコの皮をむいている時刻にぬつと大男が入って来て、大きな一枚の名刺をたたきつけるように机に置いた。名刺をみると弁護士
のAさん。この土地でAさんは影武者的有力者だ。

「やあ、いらっしやい」

いつか会いたいと思っていたAさんに、ぼくは愛想がよかった。ところが相手の目はすわっていた。

「この記事は誰が書いたのかね」

こないきさつがあった。一週間ほど前から革新派のB市議が支局に来てしきりに訴える。

「私は脅迫されている」というのだ。市がいま私有地を買収しようとしている問題についてB市議は市議会で反対演説をやった。するとそのあとB市議のバイクがこわされる。突然見知らぬ男に呼びとめられ、あの問題から手をひけ、とすぐまれる。自宅へ札束を持った男が来て「ひとつお考え願いたい」という。これは脅迫によって正常な議会活動を妨害するものだ」とB市議は訴える。そこで、地方版の片隅のコラムに「B市議はこう訴える」という記事が掲載された。A弁護士はつまりこの土地の所有者だった。

「誰が書いたかなど、お知らせは出来ませんね。記事の責任は支局長、新聞発行の責任は社長で